

求道 大道坦然前に開く

一 昭々坦々淨邦に通ず

私わたくしは私わたくしの家に歸かへるのであります。私わたくしの家は親おやの家でありまして、同時に私わたくしの家であります。他人たにんの家に往ゆくのならば、遠慮えんりよもいりません、氣兼きがねもいりません。今行いまつては如何どうであらうか、果はたして往いかれるであらうかと、氣遣づかひもすれば、氣苦勞きぐらうもします。豫あらかじめ様子を伺うかつて置おかねばならぬ必要ひつえうもあります。が、我家わがやに歸かへるには、何なんの心配しんぱいもいりませぬ。いつ何時なんどきの躊躇ためらひなく、ずかくと這入はいつて往いかれます。諸佛菩薩しよぶつぼさつの淨土じやうどならば、歸かへらして下くださいと願ねがひ祈いのる必要ひつえうもありませんが、彌陀みだの親御おやごの本國ほんごくに歸かへるには、親おやの實意じついにまかせて、歸かへらうと云いふ氣きの起おこる、それが求道きうだうであります。起おこるは私わたくしの心こころだが、起おこして下くださる力ちからは、蔭かげに親御おやごの念力ねんりきが働はたらいて居あるのです。「設たとひ世界せ界かいに滿みてらん火ひをも、必かならず過すぎて要もとめて法のりを聞きけ」と云いふ。親おやの本國ほんごくに歸かへるには、何物なにものをも打措うちおいて、四圍あま一切さいに顧慮こりよするなく、サツサと進すすみ行ゆけとの意こころであります。御親みおやは常つねに喚よんで下くださる。互たがひの間の墻壁せうへきを去さつて、親子おやこ一體たい佛ぶつ凡ぼん一體たい。大道だうだうは昭々坦々せうくたんくとして淨土じやうどの都みやこに通つうず。上あげよ重おもき尻しりを、立たてよ弱よわい腰こしを。沈痛ちんつうなる自己じこ發見はつけんによつて、自己じこの眞價しんかと尊嚴そんげんとを感かんじ來きたる時とき、心こころを弘誓くげいの佛地ぶつちに樹たて、念おもひを難思なんじの法海ほふかいに流ながさざるを得えないでないか。

けれども、我等われらが此この世よに於おける生活せいくわつは、獨ひとり暮くらしである。とはいへ、一面賑めんやかな親おや付きである。佛ほとけの力ちからは絶たえず私わたくしに加くはへられ、我が血ちに佛ほとけの血ちは通かよひ、我が肺はいに佛ぶつの息いきを吸すうてるのであります。靜しづかに此世このよの一面めんだけ眺ながめてみれば、實じつに一人一人にんのしののぎである。「後生ごしやうこそ一人一人ひとりののしののぎなり」とは蓮れん如上人にょしやうにんの仰あふせなれども、後生ごしやうまでは待まちたて、今生こんじやうこそ一人凌ひとりのぎなれ。今生こんじやうが

すでに一人しのぎなればこそ、後生が一人しのぎであり、同時に亦前生が一人しのぎであつたのであります。近い所此世に於て、一人々々が自分々々の世界を持つて、自分々々の世界に住んでゐるのである。大雑把に大勢が、一緒にたに、同じ道と同じ様に、ガヤくと進んで行くのではない。實に一人々々が、自分々々の道を、自分々々が歩んで行くのであります。

「同病相憐む」といふ。病氣の苦しさは、病人か又は病氣した人でなくては解らない。それも只病氣といふだけでなく。頭痛持の辛さは、腹痛の人に解らず、脚痛の困り方は、齒痛の人に解らぬ。矢張り同じ質の病氣の人でなくては、其の味が解らぬだけ、それだけ、相憐むと云ふことも出来ない。子供を死なした淋しさ悲しさは、實際子に離れた人でなくては知られぬ。夫に先立たれた手頼なさ不安さは、眞實夫に後れた人でなくては想像だに及ばぬ。とはいへ、いよくの處になると、夫れぐ皆別々でありまして、眞底から之を知り抜くことは出来ませぬ。その氣質に因り、體質に因り、境遇に因りて、受くる所の感じは、悉く別異でありますから、何處までも、人は獨りぐで、自分の世界に住まねばなりません。従つて、眞實に自己を知る者は自己である。

或る事件について、他人に相談を持ち掛けて見る。「好からう、さうであらう」位のことと、「やつて見たまへ」と云ふが關の山だ。半分は決めて呉れても、あとの半分は自分が決めねばならぬ。よし親友とか兄弟とか親とかで、七八分、思切つて九分九厘まで、定めて呉れた所で、残りの三分二分乃至一厘は、自分で定めねばならぬ。たとひそれが命令的に全部を決定して來たかとして、最後の實行者は自分である。人の食うた御飯では、自分の腹は脹れぬ。自分の空腹を癒すには是非とも自分で搔込まねばなりません。この意味に於

て、自分の世界は自分の創造である。自分の外に創造者もなければ、製作者もありません。

然り。私は私の世界を創造しつゝあるのである。燈火は自分で光を放つて、自分の光の眞中に住んでゐる。而もその光は、刻々に放つて、刻々に進み行くのであります。私の周囲を包む山も川も、雲の去來も、風の動靜も、人々互に共通のやうに見えても、實の所、共通なるものは、一つもありはせぬ。私は私の天地に迎へ入れられたものでもなければ、境遇に呼込まれたものでもない。世界の創造者造物主は、實にこの私なのである。私が創造するのである。向ふにあつて私を待つのではない、私が勝手に建設し、隨意に製作するのである。佛語を以て云へば、自己以外のものは、すべて自己の依報である。而もこの依報は、主體たる自己即ち正報そのものゝ、表現に外ならない。かくて私は私の世界の主人であります。

昔者、唐の李文公、一日、薬山惟儼禪師を訪れ「如何なるか是れ、惡風船を吹いて鬼國に漂着す」。惡い風が吹いて鬼の國へ、船を流し落すとか云ふことで御座いますが、これは一體どうした譯でしやうと、質問いたしました。時に薬山呵々大笑して、「李翱小子、之を問ふ、何の爲ぞ」。李翱貴様の如き子才が、そんな事を聞いて何にする。鼻であしらひ、顎で嘲つてゐる。李文公とまで尊敬せられて居る人が、小兒扱ひにせられては、胸穩かなるを得ない。腹の底の虫がムクムクと動き出して、怒りの様子が顔に顯はれた。禪師ささず。「あゝお怒りですか。その瞋恚こそ、所謂惡風船を吹いて鬼の國へ流すので御座る」とやられたので、李文公グウの音もあがらなかつたが、成程と痛く感心せられたさうです。その感心が、今度善風船を吹いて佛國へ渡すのでありませう。

二 地獄の鬼か極樂の菩薩か

彼の有名な白隠禪師が、駿州原に居られた時の事。明德遠近に傳はり、織田平次郎信茂といふ人、尾州侯東勤の砌、列を脱して禪師の庵を訪ふたのであります。「私は好んで佛法を聞き、修行にも心がけて居るのであります。その内疑問は後返りして、最初に起つた地獄や極樂の事が、氣になつてなりませぬ。その有無が承はりたう存じます」斯様に申上げると、禪師は何に感じられたか、突然大喝一聲、「汝何者ぞ」と、意外の事に面食つた信茂、言下に「武士でございます」と叫んだら、禪師嘲笑ひながら、「何と申す、何！武士と申すか。汝若し武士ならば、武士の道を修むるがよい。君の爲に忠を盡し、事あらば一死以て是に當れば、足るでないか。然るに今この小奴子、徒に餘道に迷ふ。汝でも武士と云ふのか。若し武士ならば、山伏か野伏か。どうせ碌な者ではあるまい」

信茂この語に接し、最早腹は煮えかへるやうに堪らぬが、折角來たのだから、虫を殺して言を改め、「大善知識、よろしく御教を垂れ給へ」と請ふた。禪師は「ウンまだそんなことを云つて居る。こんな奴は山伏や野伏位なら、まだせめて人間の仲間だが、それにも及ばぬ、大方鯉ぶし位だらう」ときた。信茂もう堪まらない。覺えず腰のものに手をかけ、満面朱をそゝいで、額の筋はピリ／＼動く。「さうだ、鯉ぶしならまんだ臺所の用にも立つが、手前見たやうなものは、食ひつぶしであらう」。聞くや否や、信茂「己れ眞二つ」と刀の鞘を拂ひ、禪師目がけて切り付けましたが、禪師もさるもの、するりと身をかはして、二三間向で、お出でくといふ式、怒髪天をつき、心焦立たた信茂、堂上階下逃ぐる禪師を追ひかけましたが、あちらへ逃げ、こちらへ避けた禪師。不意に背後にふりむきて「あな恐しや地獄の鬼が來た」この一言

熱せる信茂の總身に冷水を浴びせかけられた如く、平身低頭、禪師の足下にお詫した。「あな有難しそれ極樂の菩薩が來た」と。斯様に教へられました。あゝ地獄の鬼は遠方に居るのではなかつた。地獄の世界は遙か彼方にあるのではなかつた。近く我身の内心の底に潜んで居るのであります。「かいらい師首にかけたる人形箱、鬼を出さうと佛出さうと」鬼も佛も心次第で兩方とも出せるが、さて主人公はどちらであらうか。お客は奇麗に飾つてゐて、主人は粗末な風をして居る。して見ると、如何でも鬼の方が主人らしいよ。人は一生涯かゝつても、子供一人得生ぬ者はあるが、その癖鬼は至つて能く、毎日毎夜に生んで居るらしい。平生生みためた鬼が、臨終の夕にはどやく／＼顯はれて來て、我と我身をせめる。暮れた夜道は何となくお化が出さうな如く、現はれ來る鬼には、赤いのもあるであらう、青いのもあるであらう、黒いのもあるであらう、斑な鬼も居るであらう、友仙染の鬼も居るであらう、ひよつとすると、白粉つけて紅さして三味線さげた鬼も居るであらう。強ち鐵の棒さげたのばかりが鬼ではありませぬ。こんなのが、日にち毎日生れて來るのであります。

三 鬼の念佛親讓りの極樂

否、出て來るばかりが鬼ではなく、鬼を生むものは亦鬼である。鬼の親は鬼に相違ない。或人は、大きな鬼の相を書いて、その上に贊をした。

皆人の心の底の奥の院、開帳すればこれが本尊

私共も一念己れと怒つた其の有様は、全く頭に角がはえては居ませんか、身に鱗が逆立つては居ませんか、心に三熱の苦を感じては居ませんか。奥の院御開帳とあるから、本尊は大切な祕藏佛と思ひの外、大きな恐しい大鬼でありました。自分の外に誰も、自分の落ちる地獄の釜を鑄た鍛冶屋も居な

ければ、自分の生んだ鬼の外に、自分を攻める鬼も居ない。結局自分で自分の地獄を造るのであります。「心の鬼が身をせめる」とは、好く言つたもの。そんなら極樂は如何する。こんな心では到底極樂は出来ない。今度の極樂は親譲りである。親から貰つた極樂へ、私が參るのであります。久しく魔境にあつて鬼の奴となつたのが、彌陀の親御の念力で極樂の本國に、歸る身となつたのである。この親様の念力が私に届いて、重い鬼の舌が念佛に動き、火を吐いた口から、大悲の尊號が現はれて下さる。

我さへも御名を稱ふる身となりぬ、鬼の念佛あやしからまじ(香樹院)
織田信茂の懺悔はこゝである。茲に如來の淨土が其儘私の淨土となる。思ふに鬼の念佛惡魔の稱名、それが眞實の宗教であります。佛が佛となり善人が善人となるに、別に不思議はない。惡人が善人となり鬼が佛となつてこそ超世不遇の本願ではありませんか。斯くて、自分が自分の地獄を造つて、自分の地獄に落つる奴が、親譲りの自分の極樂に參つて、自分が佛になるのであります。併しその間に、遺瀨ない親の念力の働いて居ることを、忘れてはなりません。

四 當然解決すべき生死問題

支那唐の神宗皇帝の時に、蔡君謨と云ふ人があります。或時宮中に御陪食仰付つて、陛下は殊の外御機嫌である。「汝は實に美しい髻をもつて居る、全體夜眠る時は如何して置く、蒲團の外へ出して寝るか、納めて寝るか」との仰せ。今迄一向そんな事心配しなかつた蔡君謨、「アハー」と云つたきり、一寸御返事に困りました。さて宅へ歸つて寝てから、氣になつて堪まらぬ。俺の髻は至つて上等と見える。今日は畏多くも、天皇陛下から御褒めに預つた。これは一體どうして寝んで來たものか。又どうして休んだらよいものか。

夜の間に摺切れてはならぬと。蒲團の外に出せば、何だか顎が捻ち上げられるやうだし、蒲團の中へ入れば、如何やら押へ付けられるやうだ。さりとて横になつては、髻の癖が悪くなる。如何しても落付かない。出して見たり入れてみたりして、到頭一夜中髻の始末に困つて、眠られなると云ふ話があります。

思へば私共も、この人生問題と云ふ長い髻を提げてゐる。平生何も氣がつかない場合はそれで済んでも、イザとなると薩張り解らなくなつて來る。にも拘らず私共は果して、之に心を懸けて居るか。自分の生活問題や愛欲名利のためには、血を吐く思で數日を苦しんでも、果して人生問題や、死生問題のために、一夜を泣き明した事があるか。誠に蔡君謨の長髻話にも及ばない。慚愧の至りではありませぬか。所詮人生に當面して自覺し來らねば、問題は起らない。問題が起らなければ、従つて最後の解決は得られない譯。

十三年間留學の功を積んで、支那から元氣よく歸朝したといふ、眞觀大徳の許へ、四方より我勝ちにと訪問し、十三年間の出來事や、見聞についての珍談を聞かうとした中に、一老僧ありて、「貴師は長らく支那にあつて、天台を學ばれたさうでござるが、草木國土悉皆成佛と云ふ佛説は、充分御研究あつたであらう。草木成佛の仕方は如何なるものなりや、御知らせを蒙りたい」と、差出がましく尋ねましたら、大徳は黙して何の返答もない。よつて、ハハ十三年間留學と云ふ名は立派なれども、山水の風景などに現をぬかして居たと見える。一泡ふかしてやらうと云ふ心組で、再三再四同じ質問を繰返した處、眞觀威儀を正して「草木國土悉皆成佛の相を御尋ねは結構でござるが、草木國土の成佛より御邊の成佛は如何でござる。最早決定相成ましたか」の一言、グツと老僧の胸を刺した。老僧覺えず「イヤ誠にお耻かしうござい

ます」と答へたので、眞観は再び口を開かず、退席せられたと云ふ話があります。

焦眉の急と云ふは、只この生死解決、求道解脱の一事である。我等の眞實の問題とすべきは、生活の問題でない、成功の問題でない、人生の問題でない、信仰の問題でない、躍動の問題でない、歡喜の問題でない、稱名の問題でない、思想の問題でない、行爲の問題でない。唯々我等の救済の問題である。道を求むると云ふは、この救済の問題の解決に外ならぬのである。

五 虚榮虚飾の夢から覺めて

鳥がをりました。美しく見せやうとて、孔雀の羽を拾ひ集めて、身を飾り孔雀の群に入つて、意氣揚々として居ましたに、炯眼の孔雀に看破せられ、その羽を悉く抜き落されて、またもとの鳥になつて、大笑ひに笑はれましたとか。人はこの笑はれたる鳥に笑はれなかつたら、仕合せであります。實際あらゆる動物の中で、人間ほど見えを氣にするもの、外見を飾るものはありません。人間ほど大の見坊は、他に類がないと申されます。人間一生何から何まで、この見えのために悶きあせつて、いつしか到着するのは、死の帳場である。それで終りかと思へば、尙ほ葬式墓場にまで、見えを張らうとします。驚いたではありませんか。この見えの充分張られたと思ふ時、人は身の前後左右を顧て、誇り心に莞爾する。これが果して眞の莞爾でありませうか。

あらゆる笑止や。此頃の新聞雑誌で、著しく目につくものは、化粧品のご廣告である。正體の知れぬ粉や水やに、譯もわからぬ色々な名稱をつけて、囃し立てるものですから、囃し立てられた婦人は勿論、男子までが、一生懸命に塗つたり付けたりはがしたり、それはく忙しいこと。それで少しでも

美しく、見て貰ひたいとの心底らしい。皮一重にさへ、それほど苦心するのなら、肝心要の本體たる心は、嘘や美しくするだらうと思ひの外、皮膚の滑らかに光るに引きかへ、心は赤錆に錆たり。髪は櫛目正しきも、心の畠に嘗て鋤さへ入れられず、香水の薰り芳しきにかへて、雑草毒草の生ひ茂れるこそ世にも憂たてき極まりではありませんか。處で、そんな人は唐土の横町に外ないさうです。けれどもお互に、教の鏡に心を映して、摺れよ磨けよ、その美を發揮せよ。皮一重を美しくせんとの、あの熱心の半分でも心の方面に心掛けたならば、ほんに美しい人間様が出来て、眞からの莞爾は來ませう。

併し好きとなつては止められぬものか。世に茶人とか、數奇屋とか、云はれて得意がり、墓場からでも掘出したやうな缺茶碗に、百兩二百兩の大金を擲つ人も、日本にないではありませんが、これはまた、支那に於て、圖拔けた數奇屋古癖屋がありました。専らの評判者で、古物にばかり現を抜かし、古物といへば何でも彼でも、遠慮會釋なく買ひ求めるのでありました。

ところへ、或日、古い破れ箆を持つて來た人に「これは昔、魯の哀公が、孔子聖人に教を受くる時、新に織らせて敷き用ひられたものだから、買つて下さい」と云はれ「如何にも」と數多の田地を賣り拂つて、其の金で、一の破れ箆を買ひました。次には竹杖の古ぼけたのを持つて來て「これ孔子よりもズツと古い、周の文王が、北狄の難を避くる時、この杖一本を力に、國を立ち去られたものですから、貴公是非買つて下さい、命の柱ともなりませう」と、焚き付けられて「いかにも古い珍らしいもの、買はねばなるまい」とあつて、家財悉皆と取換て、非常に大事にして居ました。

すると今度は一つの古椀を持つて來た。「これこそは、太古三皇五帝の中でも、舜と申す、有難い名高い天子様が、父の瞽叟に御飯を差上げて、孝行を

盡つくされた御お腕わんだから、周しゅうの時代じだいより、もつと古いふるものです。是非ぜひお購も求とめを願ねがひたい。とても貴あなた公こうより外ほかに、之これを買かふ力量りきりやうのあるものは、御ご座ざいませんと煽あふぎ立てたられ、妻さい子しの忠告ちゅうこくも聴きき入れず、男おれは乘氣のりきになつて「俺おれが買かはねば買かふ者ものもあるまい、俺おれも大分物持だいぶんものちちになつたぞ」と、家いえも何なにも賣うり飛とばしその古ふる腕わんを手てに入れて、獨ひとりホクく顔かほでありましたが、お蔭かげで家いえも田でん地ちも何なにもありませんから、勿論食もちろんたべることも出来できぬ。家か族ぞく妻さい子しは離散りさんして、了しまひ、男おとこはそろく、哀公あいこうの古ふる筵むしろを身みにまとひ、文王ぶんわうの竹杖たけづえをつき、舜しゆんのお腕わんを引ひ抱かへ、人ひとの門邊かどべに立たたねばならぬことになりましたと。

遠とほい支那しなの古ふる噺ばなしではない、近ちかい日本にっぽんの今いまの世よに、古ふるい古物ふるもの好きずでなく、新あたらしい新物あたらしいもの好きずがありはしませぬか。流行りうかうを追おうて、新あたらしい物ものにのみ浮身うきみをやつし、妙めうに新あたしがる人ひとの、身みの果はては、さて如何どんでしやう。これが當時流たうじりう行かうの新型しんかただの、新しん模も樣やうだの、是ぜ非ひ買かつて下ください、貴あなた嬢ぢやうでなければ買かふ人ひともないなど、焚たき付つけられ、煽あふぎ立たてられては、躍やく起きになつて、親おやをいぢめ、夫をつとを泣なかせ、子こを迷まよはす人ひとはありませぬか。男子だんしとても、世よの中に酒さけと女をんなは敵かたきなり、とは云いふものゝ、何卒どうぞかたきに巡めぐり會あひたい、となつて來きては仕方しかたがありませぬ。

「淨土じようどを口くちにし、娑婆しやばを心こころにす」とは、宏くわう法ほふ師しの『往生要集わうじやうえうしふ』に申まをされた語ごである。道みちを論ろんじ、道みちを語かたり、道みちを喜よろこぶも、みな口先くちさきのことに止とどまつて、その本ほん心しんは名聞みやうもんと利養りやうとに走はしる。鍛冶屋拍子かぢやひやうしかトンチンカンの尻しりぬ拔げけ藝當げいたう。まことに恐おそれ入いつたる次第しだい。淨土じようどを口くちにするも、その目的もくてきは御慈悲おじひを賣うらんとするのではないか。娑婆生活しやばせいかわつのために佛ほとけを賣うる。心こころ得えて居ありながら滑すべる雪ゆきの道みち。「俺おれも大分物持だいぶんものちになつたぞ」とんだ物持ものちにならぬやう。誠心かいしん一番ばん、虚榮虚飾きよえいきよしやくの夢ゆめから醒さめ出いでなくては、本間ほんまの道みちは得えられませぬ。

六 慾知顔の慾知らず

度偉いお金の好きな人がありました。勿論誰しも嫌ではありませんまいが。此の男は殊の外の偉物であつたさうです。衣食住は非常に儉約し、萬事に事を缺き、義理をかき、耻をかき、時には引掻きまでして、一生懸命にためたお金。人の知らぬ處に納めては、毎日こつそりと勘定して、段々多くなるのを見ては、ホク／＼者でした。或日全體の大勘定をしてみやうと、一人二階の座敷に昇り、人に來られては大變、見付かつたら百年目と、梯子段を脱して置いた。もうこれで大丈夫、誰も來はせぬ。例の金箱を開いて、床の上から座敷中に、一枚一枚お貨幣を列べて、後すざりする。恰度書物の虫干をするやうにして、何枚々と數へつ列べつ、八疊の間一杯になつて、身は梯子段のあつた上口の處まですざつて居る。唯もう嬉しくてたまらない。もつと列べやう、も少しとすざつた途端、どつさりと上口の處から、階下の板間に落ち込んで、グウとばかり死んで仕舞つたと云ふ話がある。これは固より格別の馬鹿者の一例でせうが、金にばかり目がくれて慾惚にぼけると、とてもない失態を演ぜねばならぬのみならず、大切な命を捨てることになる。大活現成して、目のつけどころを過つてはならぬ。

「慾深き人の心と降る雪は、積るにつけて道を忘るゝ」とや。餘り慾に懲ると、慾呆けに呆けて飛んだ失敗をする。一文儲けの百失ひでは困る。「御威光で三千世界手に入らば、極樂淨土我に賜はれ」。豊公の威徳で三千世界が手に入つたとて、自分は極樂淨土一つさへ賜はれば結構だといふ、曾呂利は面白いでないか。

或田舎廻りの絹商人が、日暮方通りかゝりの安宿に泊つた。一室に落付いて主人を呼び「私は少し大金を持つて居る。どうか明朝まで預かつて呉れない

いか」と、二千圓包を出して渡した。「確かにお預かり申します」と下つて来た主人。何を思つたかホク／＼顔で、料理にとりかゝり、晚餐から朝飯まですつかり茗荷一色。給仕をする女房も異つた料理と思ひ、客も偉い茗荷所ぢやな位に思つて、何も云はずに残らず食べて了つた。主人は獨り喜んで、あれ程の茗荷には少し位効験がありさうなものと、翌朝になれば客は出立の用意をし、臺所へ来て「イヤ御厄介でした」と挨拶し、金の話はせずそこらの地理を尋ねて居る。亭主は茗荷の效能ヤレ辱けなやと、ホク／＼する處で「どうぞ昨夜の預け物を」と云はれて、ギツクリ此は仕舞つたとは思ひ乍らも、仕方はない。不承無精金を渡すと、絹商人は「左様なら」と表へ出て行つた。後で女房が堪りかね、「貴郎と云ふ貴郎は一體何をなさるので。昨夜から今朝へかけて茗荷ばかり……」と聲荒らげれば、亭主は當が外れて落膽したのか、手を拱いで小首傾げ乍ら溜息ついて、「彼男は餘程茗荷に強いと見える。茗荷を食べた人は、心が呆けて物忘れをすると云ふのに、あれ程食べさしても一向効能がない。あんな事ならいつそ、飯の中へも茶の中へも入れて置けば好かつたに」「好かつたにも何もあつたものか。あんな事をして最早客はありませんが」「茗荷で二千圓すつかり忘れて行つたら、宿屋なんかせぬでも好いでないか」「でもそれが出来ないではありませんか」「そこがさ、茗荷に強い男と見えるぢやて。併し何ぞ忘れたものはないか……オ、忘れた忘れた。茗荷は大層利いたよ。彼男は大切なものを忘れて行つたでないか」「何をかいな」「何をだつて。宿錢を拂ふのを忘れたよ」「まあ何と云ふ」「オつと此方も忘れたく。宿錢を貰ふことを」「大分茗荷の御相伴をせられたと見えます」。

貰はれもせぬ人の包に目をくると、貰ふ筈の宿錢まで貰はれぬ事になる。

持つても行かれぬ此世の事に頓着して、大切な未來を取り外しては、笑つた人に笑はれるぞ。人生か宗教か、宗教か人生か。信仰か生活か、生活か信仰か。須らく問題の着眼點を失つてはならぬ。

夢の世を永い未來と思ひかへ、慾知顔の慾知らぬ哉

七 思立つたを吉日に

荻生徂徠は一代の名儒である。「梅が香や隣は荻生宗右衛門」と其角がうたつた彼の塾も、墮落の極に達した當時では、至つて黜いかはりに、やれ歌舞よ音曲よと、寄席や芝居には人波打つて流れ込む。従つて弟子とても一向勉強はせぬ。すると或る弟子が一つ先生を皮肉つた。「先生、歌舞音曲の寄席や芝居には、澤山人が集りますが、此の塾には、何故人が來ないのでせう。」「ナニ、そりや腐つたものには、蠅が集るものぢや」と、徂徠傲然厲語。弟子は辟易して仕舞つたとある。何もひるむことはない。人は人、吾は吾、思立つたを吉日に、勇ましく求道の旅路に立てよかし。

林羅山の學友で菅得庵と云ふ人が、或年の大節季に羅山に向つて「自分はまだ『通鑑綱目』を讀んだことがないが、君は讀まれたか」と問うた。羅山が「疾くに讀んだ」と答へたので、得庵は「それでは明春から講義を聞かせてくれないか」と頼んだ處「君が果して聴きたいのならば、何も明春からでなくとも今から始めやうではないか」と、大晦日から直に講義を始めたさうである。何によらず思立つたが吉日。苟にも道を求めんとする已上は、何は措いても卽刻着手すべきである。佛法には明日と云ふことはない、何でも取急いで法は求めなくてはならぬ。

人生の無常世相の轉變に驚き起ちて、求道の旅に進まんとする人、唯だ熱誠なれ、忠實なれ、大勇猛心を發揮するところあれ。低く我心の實情を眺め

て、高く如來の心情に接せよ。そこに必ず信仰の情熱は沸き來るであらう。「たとひ大千世界に、みたらん火をもすぎゆきて、佛のみなをきく人は、ながく不退にかなふなり」。

燃ゆる火を分けても法はきくべきに、雨風雪は物のかづかは

或寺の和尚さんが、他所から柳のおろし枝を貰つて來て、之を挿木にしやうと、小僧に云ひつけて垣の邊にさゝせ、さうして言ひ含めて置いた。「子供などが來て抜くかも知れないから、よく守つてゐるがよい」。小僧は其日から竹縁に机を出して手習をしつゝ、柳を見張つて居た。すると七日ばかりたつて、和尚は庭に下りて、柳を見まはりながら、「この柳は子供が抜くだらうと思つて居たのに、少しも抜いてないのは、お前がよく番をしてゐたからだ」と褒め、「それにしても、夜のうちに子供がはいつて來て、引き抜いたら咎めやうもなかつたらうに、よくも夜こなかつたもののだらう」。「左様でございませう。夜の間に抜き取られたら、守つてゐた甲斐もないと思ひましたから、何時も初夜が過ぎると引抜いて箱に納めて、夜が明けると直ぐ挿すやうにしてゐました」。小僧澄まし込んで云ふものだから、和尚も呆れ返つて「道理で柳が芽を吹かぬ筈ぢや」と大笑ひに笑つたとや。

時々思ひ出す位の事や、思出して太儀ながらお參りする位では、仲々實功はあがりかねる。もう一つ本氣になり眞劍になつた處に、信仰の芽は吹いて來る。茲に某誌の一節を紹介する。或老媪病に罹りし時、行先が心配になつて來て、其兄に之を打明けた。兄が申すには『御和讃』には三千世界の火を過ぎ行きても法を聞けとある。數町隔つた處に法の御師匠がある。起つて歩めなかつたならば、四つ這になつて往つて聞いて來いと叱りつけた。老媪は兄の言ふ儘に這うて行つて聽聞し、厚信な同行となられた。

信の得られぬのは大事が掛らぬからである。大事のかゝらぬのは、自分の危いのが知れぬからである。讃岐の庄松に或人が「私は今から地獄の繪を拜んで来る」と申したれば「あゝ参つて御出で、善く見て來なさい。私には其は要らぬ事だがお前には要る。地獄はお前の行く處ぢや、篤と氣をつけて見てお出で」と云はれたさうである。是を思ふ時、此が爲の御本願と聞く時、唯名號一つ御本願一つ御助け一つの外はない。

八 慕直去、慕直去

一旦思立つて足を求道の道に運ぶ。須らく勇猛專精であらなくてはならぬ。中間で道草を取るやうではならぬ。大和田源太左衛門と云ふ武士。永々の浪人となつて、埋れ木の花咲くこともなく打ち萎れて暮してゐると、知己の肝煎で、然る邸に奉公する手懸りも出来、愈今日は殿様へお目見え仰付けられ、其上改めて召抱ると云ふ事になつた。彼は喜び勇んで、借物の熨斗目麻上下に威儀を繕ひ、邸へ赴けば、取次の若衆は對面の間に請じて「暫くお待ち下され」と茶菓煙草盆などを、前に置いて立去つた。

源太左衛門、待てどもく何の沙汰もない。待ちくたびれて欠伸も出かゝる所へ、家中の子供と見えて、腕白らしい七八歳位の男の子が、窃と障子を開けて、ちよこく驅け寄り、その菓子を手攫みにして障子の蔭へ持ち行きむしやく食つて居る様子。食べてしまへば、又ちよこくと來て菓子を攫む。都合三度に及べば、源太左衛門も聊か癪である。自分が浪人して居るの空腹さに、菓子を食ひ暴したと思はるゝも残念。憎い奴め一つ嚇して遣らうと、障子の側に行つて待ち構へて居る。それとも知らないで又廊下に登音、來たな驚くなと、兩手の拇指を口の兩端に突込み、食指で目の下を抑へて

障子が開くや否や、「ぐわあ！」と云ひながら怖い顔をつき出せば、何ぞ圖らん、子供と思つたは、此の邸の家老職。驚くまい事か、源太左衛門よりも家老職。其の場を飛び出し殿様の御前に参り、「あの様な狂人をお抱になつても仕方がございますまい」といつたので、彼は體よく斷られてしまつた。面目次第もなく這々の體であつた。

我身の勤め責任本務を忘れてはならぬ。彼がお邸に参つたのは、子供を嚇すためではなく、菓子子の番をするためでもなく、妙な顔をするためでもなく、只管殿様に御目見えして、立身出世の緒を求むるのであつた。それに僅なことに入らぬ眞似をするものだから、こんな物笑の種となつて、了はねばならぬ事になる。南浮の人身別用なし唯此の法を聞信するにあり。吾等は唯此法を聞いて信じて佛になるために來たのである。その根本の目的を忘れて、枝末の世事に惑はされてはならぬ。本樹つて末行はる。

九 切々道を求めて已まざれ

道を求むるは須らく眞劍でなくてはならぬ。求めたりされど得られずと云ふか。あゝ眞に求めたるか。汝は親鸞聖人の如く我心を摧きしことあるか。善財童子の如く、之が爲に我身を捨てんとせしことあるか。慧可の如く之が爲に我が腕を斷ちしことあるか。少くとも熊澤伯繼の如く、三日三夜師門に伏せしことあるか。或は又劉備の如く師廬を三顧せしことあるか。今日如何に世濁れりとて、求めて道の得られぬ譯なく、如何に人拙しとて、請うて師に會はれぬ筈はなからう。時降り世濁れりと雖も、此世は佛の世なり、佛心に顯現の世界なり。我等親鸞聖人の如く師を求むるの時、必ずや法然上人は我等の前に來り給はん。我等、慧可の如く師を求むるの時、必ずや達磨大師は我前に再來せん。我等、伯繼たるの時藤樹出で、我等劉備たるの時孔明現は

れん。求めよ、世間必ず應ずるものがあらう。叩けよ門は必ず開けん。打てよ響は必ず聞えん。かくても尚且つ、道を得る能はず師に會ふことが出来な
いならば、之を古の聖賢に求めよ、古今の書に求めよ。宇宙森羅の實相に
求めよ。大千世界、いづれのものか孰れの人か、我を教へ我を導かぬことが
あらう。而して靜に自己に省て、道心の有無に驚け。

昔は何卒道心を發したいものよと、本尊の前に額づきて、「我に道心を發さ
せ給へ」と祈誓をかけしに、「其心即ち道心なり」との御告を蒙つたと云ふ。
然り我は何故かくも道心が薄いのであらう。古の高僧傳や、妙好人傳は讀
むさへに涙を催す人もあるに、あゝ我何故道を求むるに忠でないかと、耻づ
る心即ち是れ道心であると云つてよい。

大阪と關東と決戦したときであつた。徳川頼宣の家來で矢部虎之助といふ
者があつた。力飽まで強く身材群を抜き勇猛の者であつたが、其の軍裝が又
物々しきものであつた。先づ長さ二間の指物を差し、三尺に餘る太刀を提げ
大位牌の立物に「咲く頃は花の數にはあらねども、散るには漏れぬ矢部虎之
助」といふ一首の歌を書き記してあつた。この出で立ちを見たものどもは、
其の異様な風に驚き、さてもく見事なものよと云ひ囃した。然るに愈合
戦となつてからは、虎之助の裝束が餘り重いので馬が疾く進まず、動もすれ
ば諸人より後れ勝ちで、兎角軍功がなかつた。それで人々から、「虎之助は鬼
面、人を嚇すもので御座る、裝束のみ大袈裟で働きは一向に御座らぬ」と、
評判立てられるに至り、虎之助無念やる方なく遂に自刃してしまつた。

餘りに道具立の太く多く、虚名にかられては何事も得られず、實を失ふこ
とになる。求道の事も餘り道具立の大袈裟なのは感心せぬ。褪め易く變り易
いからである。如來の本願には赤裸々になつて進まねばならぬ。雜毒の善、

虚假の行、皆悉く打ち捨て、本願の大道に慕進し、二尊の仰せに信順すべきである。

十 鏡面を打破し來れ

之を彼の了然尼の事蹟に見よ。彼女は武田信玄の玄孫にて、もと總と名づけ、東福門院に奉事せしが、門院崩御の後勸められて、松田某に嫁するに當り、三子を擧げなば去ることを許さるゝを以てした。二十四五歳にして三子産出の約を果したから、辭して佛門に入らんとし、當時の名僧弘福寺の鐵牛の許に赴きて、許を得んとした。鐵牛その容色の美麗なるを見て、「佛敵法敵の化物、門内に入ることならぬ」と拒絶せられた。次いで白鷗師を訪ひしも同様魔魅として許されなかつた。彼女は殘念で堪らない。折角法を求めんとして此處まで來りしものが、化物として入れられぬ。己れ厄介な我面よと、乃ち民家に入り、鏝を烙いて我面にあて、顔面を焦爛し、眞の化物面になつて、再び白鷗師を訪ふた處。和尚驚いたの何のて、般若の鬼面も斯くやと思はるゝばかりなる上に、昭々として求道の赤誠が顯れて居る。和尚熟々感じ入つて漸く尼たるを許したと云ふ。其時鏡裏に書き記したのが斯うである。

「昔遊宮裡「燒蘭麝」、今入禪林「療面皮」、四序流行亦如此、不知誰是箇中移。生ける世に捨て、たく身やうからまし、遂に薪と思はざりせば」。

我等了然の壯擧は及ばずとも、精神上三つの顔面だけは燒捨てねばならぬ。蓮師は深く之を嫌はれた。曰く我身あり顔。曰く我心得顔。曰く我物知り顔。此三を燒捨て、須らく精神上のお多福にならねばならぬ。「本願にあふた福こそ嬉しけれ、鼻はひくうて頬(法)は高うて」。あゝ友よ。至心に精進に道を求めて止まざれ。「面の皮は薄く、足の皮は厚く」。働いて足の皮を厚くし、耻を知つて面の皮を薄くしたいものである。徒に空想に耽つて

はならぬ、着實堅牢の氣象を養へ。人ありて問うて曰く「純清絶點の時如何」
鏡には一點の曇もないが、これで好からう。古人は答へて云ふ「猶ほ是れ眞常
の流注」僅な迷が残つてゐるぞといふ心持。それではまだ是以上進むべき道
があるのかと云ふので、其人が「向上別に事ありや」。曰く「在り」。「如何な
るか是れ向上の事」。答へて曰く「鏡を打破し來れ、吾、爾と相見せん」。眞
に向上の事が聞きたいならば、鏡を打破して來い、貴様は一つの鏡を持つ
て居る。一つの見識我見を持つて居るから不可ぬ。それを打破つて來い、其
の時相見するであらう。了然尼の顔に最初どんな鏡が懸つて居たであらう。
必ずや彼の美貌と、虚飾とが輝いて居たに相違ない。それが鏝一挺に打破ら
れた處、正しく眞實の法器として相見するを得たのであります。我等亦大に
打破すべき鏡があるのでなからうか。

青丹よし奈良の都は咲く花の、匂ふが如く今盛りなり」といふも「奈良七
重七堂伽藍八重櫻」といふも、共に奈良朝の盛大を謳つたものである。其時
の建立で音に名高い大佛様へ、或人が參詣しての歸路。門前の餅屋に這入つ
て休んだ。暖簾には大佛餅と太文字に染抜いたものゝ、餅は至つて小さい。
不審に思つて聞いてみれば、主人の答が面白い。「夫れは其筈。貴方が大佛様
の素敵滅法大きい處を拜まれ、其の眼で外の物を御覽になりますから、皆小
さく見えます。餅は決して小さいのではありませぬ」。「成程、それもさうか」
と合點して茶代を置いて出かけた。町を離れて田舎道にかゝると、路傍の大
樹の下に、可愛らしい子供が寝かしてある。すやくと何も知らぬらしい、
「可愛想にこんな罪もない者を、路傍に捨てるとは、どんな鬼心の親であら
うか、酷い事をする」と、獨言をいひながら、抱き上げて懷の中へ捻ぢ込
み、またそろく歩き出したところが、だんぐ重くなつて來て、とてもく

堪へられない。こんな筈はないがと、取出して調べて見れば、こはそも如何に、赤兒と思ひの外、乞食の婆さんであつた。

何と大佛様を拜んで随分と眼の肥えたものである。私共の眼は段々と肥えて行つて、最初満足してゐたことも、次第にそれでは濟まされぬ事になり馴れては珍しさが抜けて来る。あがりあがつて落處を知らぬ事になります。たゞ夫れ妄想の業鏡を打破して進め、慕直に進め、大道は坦然として我等の前に開け、本願の白道は昭々として淨邦に通ず。徒に疑怯退心を生ずる勿れ。今は時、聞思して遲慮するを要せぬ。汝の頭上正に一塊の氷雪を置いて、靜かに如來の大法を聞け。

『高僧傳』を按ずるに釋慧嵬法師は、晋の隆安年中に有名な法顯三藏と入竺した人である。頗る人生の妙味を悟つて、多くは山中に住して座禪してゐられた。すると、其の山の鬼神が、如何にもして此奴の荒膽を挫いてくれやうと、種々苦心した揚句、頭のない鬼となつて慧嵬の面前に現れた。けれど慧嵬は平氣なもの。「イヤ面白い化物！、頭が無いな。頭がないなら頭痛がせぬでよからう」。チャカされた鬼神、今度はと、腹のない化物となつて現れた。「イヤ今度は腹がないでないか。面白い、定めて腹が立たぬでよからう」とやつて、鬼神も凹んでしまつたが、今度は窈窕花のやうな美人となつて現れ。「妾は天女よ。上人のお徳を慕つて參りました。情願お側に長く」。云ひも終へぬに慧嵬。「革囊の衆穢去れ」糞袋逃げて仕舞へとやつて、鬼神の方が却つて膽を潰して仕舞つたさうな。

面白い、非常に面白い。世間の人は常に怪物に捕へられる。眼なきものは無眼の怪物に耳なきものは無耳の怪物に、乃至病魔に貧神に、所有物に襲はれて日夜に呵責せらる。悟れ、解脱せよ。塙保己一の如く肉眼者を憐むに至れ。「世

の住み憂は厭ふたよりなり」。起つて道を求め、不動地に至つて、更に悠々天地に逍遙し來れ。「柿を見て家事の苦勞は思はじな澁さまされば甘さまされり」。